

年下の子や、新しく移ってきた友達のことを「よろしく」と言われれば、だれでも「分かりました」と答えますが、状況によっては、それが大きな悩みになってしまうことがあります。子どもに責任を負わせるような頼み方をしないように注意しなければなりません。「今日は駅まで連れていってくれる？」というように、一回で完結するような具体的な依頼をしたり、「ときどき声をかけてやってね。」と大きな責任を伴わないような頼み方をしたりすれば、引受ける方も負担を感じないですむでしょう。

外国での生活を始める時、久しぶりに帰国したときなどに、前から住んでいる人たちの助けは絶対に必要です。人間は、助けたり、助けられたりして生きていくものですが、残念なことに、助け、助けられる関係にあった人たち同士がうまくいけなくなり、おたがいにストレスのもとになっている例は少なくありません。相手の立場や気持ちを十分にくんで、上手に頼み、頼まれるようにしたいものです。

◆「今日、嫌なことあった？」(O先生の話から)

1年生が家に帰ってくると、今日は学校で楽しく生活できたかどうか、困ったことはなかったかどうか聞きたくなるのは当然です。けれども、「今日、嫌なことあった？」のような質問の仕方はやめてください。子どもは、お母さんの期待する答をしようとするものですから、これでは、「そういえばBちゃんに押された」「C君にいやなことを言われたことを思い出した」というふうに嫌なことをさがすようになってしまいます。「Bちゃんに、どうやって押されたの」「それはひどいわね。ママが先生に電話してあげるわ。」というような展開は最悪です。実は本人がたいして気にしていなかったかもしれないことをわざわざ意識させて、学校を嫌なところだと思わせるようにし向けているのです。

逆に、「今日はどんな楽しいことがあったの?」「あなたの好きなお友達はだれ?」というような質問をすると、学校の楽しいところ、友達のいいところがクローズアップされ、多少の嫌なことは忘れてしまって、次の日も元気に学校へ行くことができるでしょう。こんな子は、友達にも好かれ、ますます学校が楽しくなります。

大人の役割は、子どもに自信をもたせ、安心して学校生活ができるようにしてあげることです。親が子どもの力を信頼し、「あなたは大丈夫」というサインを送ってあげることが大切です。子どもは、日々成長しているので、学習の面でも、社会生活の面でも、大人が想



助け合う補習校の仲間

像する以上に力を発揮することがあります。大人の側に不安があっても、それが子どもに伝わることは決して良い結果をもたらしません。

住む国や通う学校が変わることについて、子どもはどうすることもできません。前の学校がいくらよくても、そこに帰ることはできないのですから、今の学校や新しい友達の悪いところをいくらあげても何の利益にもなりません。それよりは、新しい生活の良い点、友達の優れたところを探す方がずっと理にかなっています。違う考え方、感じ方にふれ、いろいろな文化の良さを柔軟に理解する力を育てる機会を与えられている子どもたちが、そのチャンスを十分に生かしながら成長してほしいと思います。

* * * *

最近日本で「1年生プロブレム」という言葉が聞かれます。うまく学校生活ができない新1年生が増えて、学校が苦慮しているのですが、その大きな原因は、少子化、核家族化、地域の変質などのために、子育ての知恵がうまく伝承されなくなり、お母さん、お父さんが自信を持って子どもに接することができなくなっていることにあると思われます。初めての啓明学園の「歓迎セミナー」は、好評でした。経験のある人から話を聞く機会をたくさん作ることは、ますます必要になっているようです。

編集長から一言

「歓迎セミナー」を例にとって、海外生活への適応での「小さなトラブル」を解決することの大切さを指摘していただきました。

海外での生活経験が豊富で、また日本の学校で日々小さな子ども達に接している佐々先生が、共通点を明らかにしています。

新1年生の保護者同様、海外渡航直後の子供や保護者は、本当に小さなことでストレスを感じます。そのストレスは、学校のルールや社会の仕組みが理解できるようになるまで続きます。

海外渡航者への「歓迎セミナー」を、自分の経験を振り返って、心から望みます。本誌が「歓迎セミナー」の代わりになれる様にがんばります。